

(別紙1)

論文の内容と要旨

論文題名 近代日本の宗教言説とその系譜—宗教・国家・神道

氏名 磯前 順一

本博士論文は各部3章構成の3部からなり、そこに各部一つずつの付論と序論・終章を加え、全部で14本の論文からなる。まず、序論「宗教概念および宗教学の成立をめぐる研究概況」において、1960年代から今日にいたる宗教概念と宗教学の歴史をめぐる研究状況を把握したうえで、第1部では「宗教概念の形成と近代的学知」、第2部は「宗教学の成立と展開」、第3部は「神道学の成立と国家神道」という主題を扱う。すなわち、第1部では、近代における宗教概念の定着過程から論述を始め(第1章「近代における「宗教」概念の形成過程—開国から宗教学の登場まで」)、明治中期代における宗教をめぐる哲学的言説の把握を井上哲次郎の著作を通しておこない(第2章「明治20年代の宗教・哲学論—井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義」)、明治期からアジア・太平洋戦争期にいたる仏教概念の成立と展開を広汎に追う(第3章「近世「仏法」から近代「仏教」へ—多重化する近代仏教」)。そこに付論として、日本の宗教言説を考えるうえで社会制度的な前提をなす国家神道に対する概括を加えておく(「国家神道をめぐる覚書—西洋化のなかの日本社会」)。

ここでは、宗教概念を軸として神道・哲学・仏教の諸概念の言説編成が明らかにされることになる。すなわち西洋の宗教概念が日本に移入され、受容・定着する。その結果、大日本帝国憲法の成立をひとつの画期として、「宗教／世俗(道徳)」という二分法が成立し、宗教は私的領域に、道徳は公的領域に割り当てられる。すなわち、仏教はキリスト教とともに宗教の範疇に属するものとされる一方で、哲学や神道は道徳の領域に属するものとみなされたのである。西洋に出自をもつ宗教概念の移入はその概念にとどまる問題ではなく、

宗教をめぐる諸言説の布置そのものを変動させてしまったのだ。

第2部では、オウム真理教事件を契機とする今日的観点から宗教学的言説の問題点を分析し(第1章「宗教学的言説の位相—姉崎正治論」)、特に宗教学の始祖である姉崎正治の思想形成過程を明らかにしたうえで(第2章「西洋体験とナショナリズム—姉崎正治における国家と宗教」)、明治期からアジア・太平洋戦争期を経て現在にいたる宗教学的言説の特質が宗教学界全体の問題として論じられる(第3章「宗教学の展開過程—「宗教」という経験」)。そこに付論として、日本宗教史をめぐる研究史の総括を、近代史を中心に加えた(「<日本宗教史>の脱臼—研究史読解の一試論」)。

ここでは、姉崎をはじめとする東京大学の宗教学を軸に、日本の宗教学のもつ学問的構造が近代各時期の社会状況とのからみのなかで明らかにされることになる。すなわち宗教学は自己の意識とは異なって、客観・中立的な純粋性を保持するものではなく、近代日本の社会状況のなかで、明確な一定の政治的役割を果たすものであった。それは一方で、「宗教/世俗(道徳)」という二分法にもとづいて成立した信教の自由を信仰者の立場にたって守ろうとするものの、他方でそこで確立した宗教的な回路を通して、個人の内面を国体イデオロギーに結びつけるものでもあった。そのような個人主義と国家主義のはざままで、宗教学は宗教とは何かという定義を通して、個人と国家のあいだに独自の仕方で介入することを試みた学問であったと言える。

第3部では、第1部の宗教概念、第2部の宗教学、それらの成立と展開の歴史を承けて、神道学と国家神道の歴史がどのように成立し展開していったのかが論じられる。すなわち、まず近代神道学の成立過程をその創始者である田中義能を通して明らかにし(第1章「近代神道学の成立—田中義能論」)、次いで近世神道から近代神道学への移行諸段階を東大神道学研究室の蔵書分析から素描し(第2章「近世神道から近代神道学へ—東大神道研究室旧蔵書を手掛かりに」)、最後に国家神道と天皇制の問題を日本における宗教概念のあり方をふまえて論述する(第3章「国家神道と天皇制—近代日本の「宗教/世俗」」)。そして、付論として、記紀と考古学の拮抗関係から天皇制をめぐる言説分析に補足を加える(「天皇制国家の言説空間—記紀と考古学」)。

ここでは、神道という言説が、宗教概念との対抗関係を通して、どのようなかたちで土着的なものを表象するに至ったかを考察する。すなわち、神道を原始・古代から連綿と続く超歴史的な伝統体と見るのではなく、近代西洋化の文脈のなかで再編された作られた伝統という見解をとる。だが、それをたんに西洋近代化の産物として片付けるのではなく、そのような西洋化に対する土着側の対抗の試みとして、西洋の論理に浸蝕されながらも、その言説空間の内部においていかにして西洋の「宗教/世俗(道徳)」という二分法、ひいては「信教の自由」の権利を抹消するかという保守層側の試みであったと捉える。そのような近代西洋化と土着側の対抗関係は、宗教学と神道学というともに近代に設立した言説の角逐を通して確認することができるが、あくまでもそこでの論争点は神道が宗教か道徳かといった議論にとどまり、神道がその権威の背景とする天皇制自体を戦前の日本社会は、

ごく一部のマルクス主義者を除いて問題することはできなかつた。それを批判したマルクス主義陣営として、天皇制の世俗的側面に焦点を当てたにとどまり、天皇制自体のもつ、「宗教／世俗(道徳)」という二分法を超越した性格そのものを論理的に究明することはできなかつたのである。

さらに全体の結びとして、終章「日本宗教史の成立—内面をめぐる言説布置」を置き、宗教をめぐる言説が文学と歴史学の言説とどのような関係性のもとに展開されていったのか、広く人文学一般を視野に収めた叙述のなかで、日本宗教史という言説が 1930 年代から 1940 年代にかけてどのように成立していったのかを論じる。ここに宗教概念は宗教学・神道学・仏教学など宗教言説だけでなく、歴史学という世俗的言説とも結びつき、宗教史という新たな言説を生み出していくことになるのである。